

北海道における児童図書館の歴史 1

— 児童図書館千代見園 —

谷 口 一 弘

はじめに

わが国における図書館の児童サービスの最初は、大日本教育会が嚆矢といわれている。明治16（1883）年設立の大日本教育会が、同20（1887）年3月に附属書籍館を開設し、ついで6月に小学生図書閲覧規則を定め、児童図書室を併置したのがその始まりとされる。

その後、少しずつ全国各地に児童図書室を付設する図書館がみられ、特に明治43（1910）年のいわゆる小松原文相の訓令^①による児童室設置の奨励もあってか、多くの図書館に児童図書室が備えられることになる。

一方北海道では、明治42（1909）年3月開館の私立函館図書館が、普通室（一般閲覧室）のほかに婦人室と児童室とを併設し、児童サービスを開始している。函館図書館規則第3条では「満五歳以上ノ者ハ何人ニテモ本館ノ図書ヲ借覧スルコトヲ得……」^②と明記し、児童の利用時間は、午後5時までと定めている。これは、北海道における図書館の児童サービスの始まりとも考えられるが、なお今後の検証を必要とする課題である。

この私立函館図書館の児童室開設からおおよそ1年後には、同じ函館において児童図書館千代見園が開館している。明治43年11月、設立者は寺井四

郎兵衛である。

本稿は、これまで北海道図書館史のなかで、殆ど言及されることのなかった児童図書館と児童サービスについて、その歴史的経緯やサービスの実際を明らかにすることを意図し、ここではその児童図書館千代見園について設置の経緯等を検証しようとするものである。

1. 寺井四郎兵衛について

この頃の函館は、北海道の玄関口として北海道の開拓や移住への出発地点であり、また樺太、千島に及ぶ北洋の拠点でもあった。つまり、北海道開拓期から昭和初期にかけて、函館は北海道の経済・産業の中心的位置にあり、かつ交通の要でもあった。このことは同時に、時代の社会的背景としての多くの失敗者や挫折者の集中する都市でもあった。

このような時代的社会的背景のもと、身寄りのない老衰者や孤児、棄民などの救済を目的として、明治33（1900）年12月、函館慈恵院（以下、単に「慈恵院」という）が開院された。設立は、仲山与七^⑧、上田大法^⑨、寺井四郎兵衛の三氏の発起によるものであった。

寺井四郎兵衛は、この慈恵院設立の動機を「二十五六歳の頃名古屋の先輩で故佐藤春蔵君より平子徳右衛門君の愛知育児院の為に御尽力なさることを聞きまして、私も将来は萬望育児事業に従事致したいと心掛けておりますと、明治三十三年十月上田大法師が吉祥寺女学校建設の事で見いられました時、凶らず平素の希望を開陳いたしました。其時已に上田師と仲山与七君とが育児事業御計画中で、私も其のお仲間に入れて頂きましたのが、即函館慈恵院設立の動機で御座います。」^⑩と述べている。すでに、仲山と上田の二人との間で進んでいた慈善事業の計画に、寺井が加わり実現をみたものである。

この慈恵院設立の資金として、仲山と上田が各500円を、寺井が1,500円

を拠出している。さらに寺井は、新川町274番地所有の私有地1,428坪をこの事業のために寄付、11月11日ここに慈恵院院舎が竣工し、12月開院となった。理事長に寺井が、専務理事には仲山、理事は上田と決まった。これが後に、この同じ敷地内に児童図書館を設置する契機となったのである。

寺井はその後も、明治39（1906）年には土地2,657坪を、また維持費として同33（1900）年から大正12（1923）年までの23年間にわたり、総額9,124円を寄付して慈恵院の財政的基盤を支えていた。

寺井四郎兵衛は慶応3（1867）年6月18日、父四郎兵衛（初代）と母千代子の長男信太郎として箱館（函館）に生まれた。明治16（1883）年4月、父の死去により17歳にして家業の金物店を引き継ぎ、二代目四郎兵衛と改名する。『函館厚生院六十年史』^⑧（以下、単に『六十年史』という）によると、「精励刻苦の甲斐あって、家運が次第に開け、金物店、陶器店、鋼鉄店、漆器店、機械店、電気部、地所部等多角的な経営に乗り出すことが出来た。」と語っている。さらに「氏は慈善の心厚く、上田大法、仲山与七と相識るや、共に提携して、明治33年3月」、先の慈恵院の創設にいたるのである。

2. 児童図書館設置の経緯 (1)

児童図書館千代見園は、明治43（1910）年「十一月六日、寺井四郎兵衛が新川町二百七十四番地の所有地内に児童の文化的施設として千代見園を設け、園内に児童図書館を作り、無料で閲覧せしめることとし」^⑨（点線は筆者）、慈恵院と同じ敷地内に設置されたものである。

これより先、明治37（1904）年7月慈恵院に育児部が増築されたが、翌38（1905）年12月この育児部から失火、慈恵院院舎を全焼することになる。このため寺井はあらたに、同じ敷地に隣接する私有地2,657坪を院舎用地として同39（1906）年に寄付し、ここにまず同年9月建坪150坪の育児舎

が竣工した。

明治40（1907）年2月、宮内省より院舎再興費として金500円を下付され、同5月には北海道庁から建築補助金として900円を交付された。こうして、明治41（1908）年7月新しく建坪350坪の慈恵院院舎が竣工し、再建された。

この再建により、ようやく院舎の事業も軌道にのりだした「明治四十三年十一月六日、函館区東部方面児童の爲めに千代見之園公開す、館の内外共に児童の遊樂に供せんとし、遊樂に伴ふ読書の趣味を涵養せんことを期し」^⑧（点線は筆者）、児童図書館千代見園が設置された。「建物は三十坪位の洋館、瓦屋根ペンキ塗、敷地は二千三百坪で、五百坪の池があり、三四十株の青松の間にブランコ、遊動円木等の遊園も設けられた。毎日曜ここで篠崎清次^⑨のお伽噺の会が催された。」^⑩

児童図書館千代見園は、寺井四郎兵衛が母千代子の古希を祝い計画したものである。千代見園の名前は、この母の名に因んで巖谷小波^⑪の名付けによるもので、当時の園内に

竹の春 雀千代ふる お宿かな

の小波の句碑が建てられていたといわれる。

この児童図書館千代見園は、「児童の遊樂」と「読書の趣味」とを意図した、「児童の文化的施設」としての性格が強かったようである。毎日曜開催されているお伽噺の会などは、今の児童サービスとしての「読み聞かせ」に当たるものであろう。

『函館図書館第貳年報』には、明治「四十三年函館ニ千代見園文庫起ル之レ本道ニ於ケル児童専門文庫ノ嚆矢ナリ札幌ノ戊申文庫^⑫ハ未ダ公認セラルルニ至ラザルモ学校附属ノ図書館トシテ近キモノ」^⑬（点線は筆者）と紹介されている。この当時、全国的に図書館設置が増える傾向となり、特に明治30年代に顕著にみられる通俗図書館の普及が、大正後期から昭和5年頃を頂点としたその前後の時期とも合わせ、国家的行事や皇室の慶事に

組み入れられた図書館が設置されるピークであった。

しかし、その多くは設置場所を主に小学校や町村の集会場所に求めたに過ぎない図書館である。特に学校付設の場合には、のちに学校図書館あるいは児童図書館の先駆と混同されており、その殆どは検証されていないのである。こうしてみると、函館図書館をして「児童専門文庫」と言わしめた児童図書館千代見園の存在は、単独の施設として用意された児童図書館として、大きな意義があるといえる。

3. 児童図書館設置の経緯 (2)

ところが、この児童図書館千代見園開設まもない翌44 (1911) 年8月29日、「本院浴場から失火して院舎を全焼し、焼死者七名を出した。……焼失建物二十棟、七百七十六坪。損害一万五千元に上った。」^⑧

しかし、「院舎を全焼」とあるにもかかわらず、この火災では児童図書館千代見園は類焼を免れていたようである。それは、大正2 (1913) 年の新聞に「千代見園参観記、上・下」^⑨ の見出しで、「お伽噺の大家巖谷小波先生が……再び来函して二十三日から当区千代見園、少女読書会、図書館の為に講演会」を開催の予定であると報じ、事前参観の記事が2日にわたり掲載されているからである。ここでいう「少女読書会」の詳しい事は不明であるが、「図書館」とは函館図書館を指している。

この記事のなかで、「千代見園の位置は新川町の二百七十四番地である……慈恵院の元育児部のあった畑地の裏手に当る……建物は三十坪位の西洋館で、瓦で屋根を葺き屋壁は木造であるが、ペンキ塗の小酒張りした」建物であると紹介されている。この記述の部分は、先の明治43年に設置開館したときの建物の外観と一致しており、児童図書館千代見園は慈恵院とは離れた位置にあったがため、類焼を免れたものであろう。また、建物の再建記録の中にも千代見園についての記載が見えない。

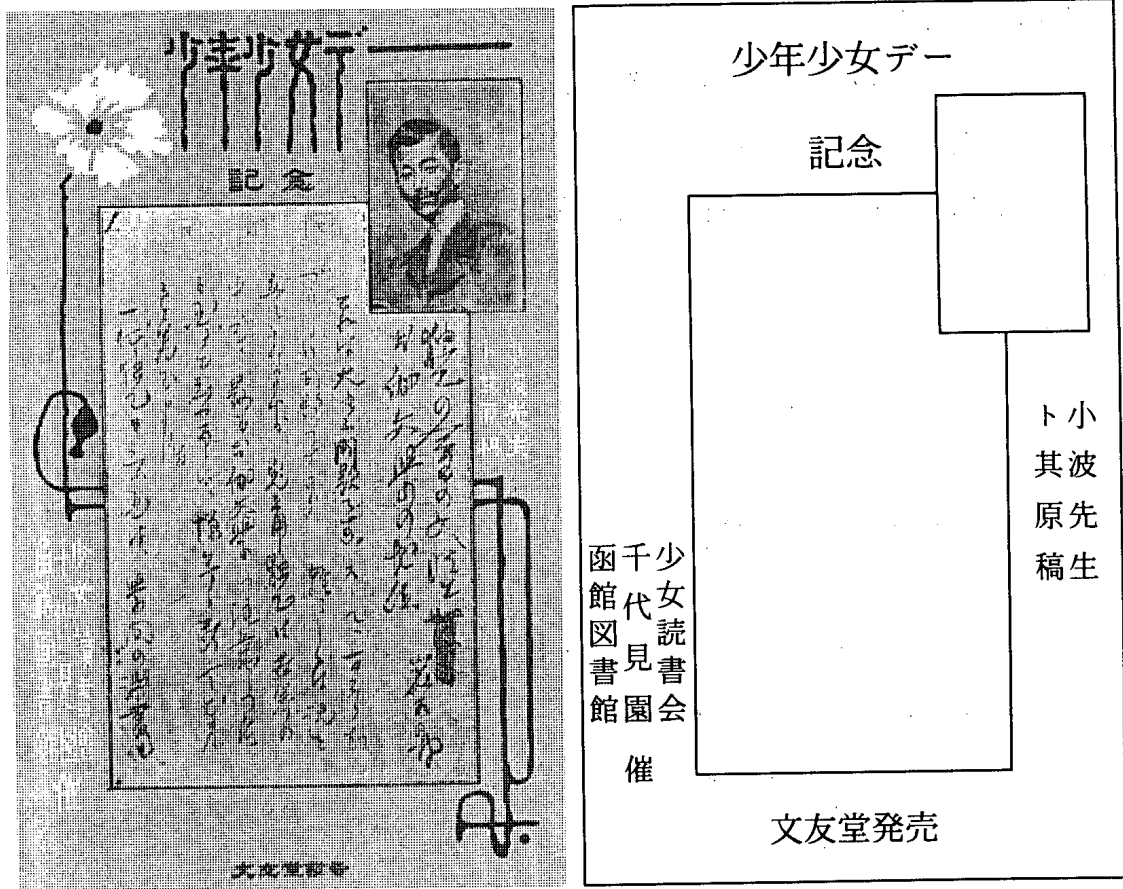


図1 巖谷小波講演会記念絵葉書 (大正2年8月23日)

ところがこの参観記ではさらに、「児童室は四間半に五間半の広さで、其処に頑丈な卓子と腰掛けとが備え付けられ、……図書室のやうなものも設けられてあるが、児童図書館の目的ではないから、図書は余り集めないさうである」(点線は筆者)と、千代見園は児童図書館としてではないとも受けとれる記述がある。これはどういうことであろうか。

しかし、同じ参観記のなかで「園主寺井氏の本園を設立するに至った動機は、随分久しいものであるさうだ、之は都新聞とかに連載された児童図書館を読んで感じた事で、其後上京の際予て旧交のある小波先生に面会して、其の記事の記者に紹介されたのが抑の起因で」(点線は筆者)さらに「設備の未だ整はない所があるが、寺井園主の計画は決して之で満足するものではない」と、ここでは児童図書館はいまだ整備途上であると考えら

れる記事内容となっている。また、慈恵院としては先に2度の失火（明治38年12月と44年8月）による財政的負担が重く、このことも結果的に開設まもない児童図書館の整備に影響を与えていたものと考えられる。

ところで、寺井四郎兵衛は、いつ頃からいかなる理由で児童図書館設置を意識したのであろうか。しかも寺井は大正7（1918）年11月には、一般成人を対象とした図書館彰善館をも、同じ敷地内に設置しているのである。

このことに関しては、先の新聞記事の参観記にみられる動機を裏付けるものとして、函館彰善館『開館紀念誌』に児童図書館千代見園設置についての寺井自身の、千代見園開設記念式での挨拶文が収録されている。^⑧ これによると、「六七年前よりして、本区東部方面の児童の状態を見まするに、施設すべき事多々御座いますが、其中に児童図書館と、児童遊園とを兼用するものを設立して」（点線は筆者）と、その意中を述べ、さらに「数年前にも、知己の御方と御相談を致し、又其準備にも着手致し」「上京の上、……巖谷小波、……久留島武彦等の諸君に詢り、御懇篤の指導を得て、計画の上工事に着手致しまして、ここに本日（明治43年11月6日）開館式を挙行致した次第で御座います」（（ ）内は筆者）と述べている。

寺井は仲山、上田の両氏と共に、慈恵院の設立に参加したときからすでに、子どもたちの更生と社会復帰を念頭においた、次の新しい施設を思案していたものと考えられる。当時の函館のなかでも、ここ新川町地区一円はスラム地区といわれており、ここで生活している貧窮児童の救済には特に力を注いでいる。その一つとして、大正6（1917）年7月私立大森小学校を開設し、地区内の貧窮児童に義務教育を開始、昭和2（1927）年市立大森小学校へと引き継ぐまで続いた。

こうした寺井の社会事業・慈善事業に対する意識が、母千代子の古希の祝い、さらには巖谷小波等の助言もあり、児童図書館千代見園、彰善館の設置へと結実したものと考えてよいであろう。当時の新聞の人物コラム欄に、次の如き評がみられる。

世間或はわが寺井君を目として、一個の偽善家となし、仮面よく自他を欺瞞するの小人に不過となす者あるも、恐らく是れ君を知らざるの甚だしき者と云はざるべからず。君の先代は力勉寛厚の人、母堂また温良玉の如きの人たり。君この間に生まれて一種の道德的処世観を継承し来る。……君また独が児童図書館を創設し称して千代見園と云ふ。蓋し千代は母堂の名……君や一方堂々の太賈、豈賣名に汲々たるの要あらむや。宜しく行々の心、正々の旗を進めて、世間の毀誉褒貶の上に超越する所ありて可なり^⑧

と。

4. 児童図書館千代見園のその後

大正7（1918）年11月10日、「季は初冬に属して寒風凜烈」^⑨のなか千代見園内で盛大な式典が挙行された。寺井四郎兵衛が、同敷地内に新築した通俗図書館彰善館の開館式である。当日の出席者は、函館区内の政財界、教育界、社会事業関係者等百余人ほどで、函館図書館主事岡田健蔵も出席し祝辞を述べている。これより先、寺井は今上陛下御即位記念事業として、前年5月から千代見園に隣接して新築中であつたものである。「これは千代見園の児童図書館であるに対して一般向の図書館」^⑩として、設置されたものであつた。

当時の新聞記事は、寺井氏の記念図書館落成として、「今回落成を告げたるを今上陛下御即位第七記念日なる来る十日を卜し同日午前十時より開館の式典を挙行……該図書館の概要に就いて聞くに千代見園敷地は二千三百坪（池五百坪）、総坪数二千八百坪内建坪総数二百二十八坪半、千代見園（児童図書館）三十坪、教育参考室十七坪半、彰善館（普通図書館）四十坪、時習寮（寄宿舍）四十一坪なり」^⑪と、報道されている。この時に新施設として彰善館のほかに教育参考室と時習寮も併せ新築されている。

大正七年十一月十日第七御即位記念日

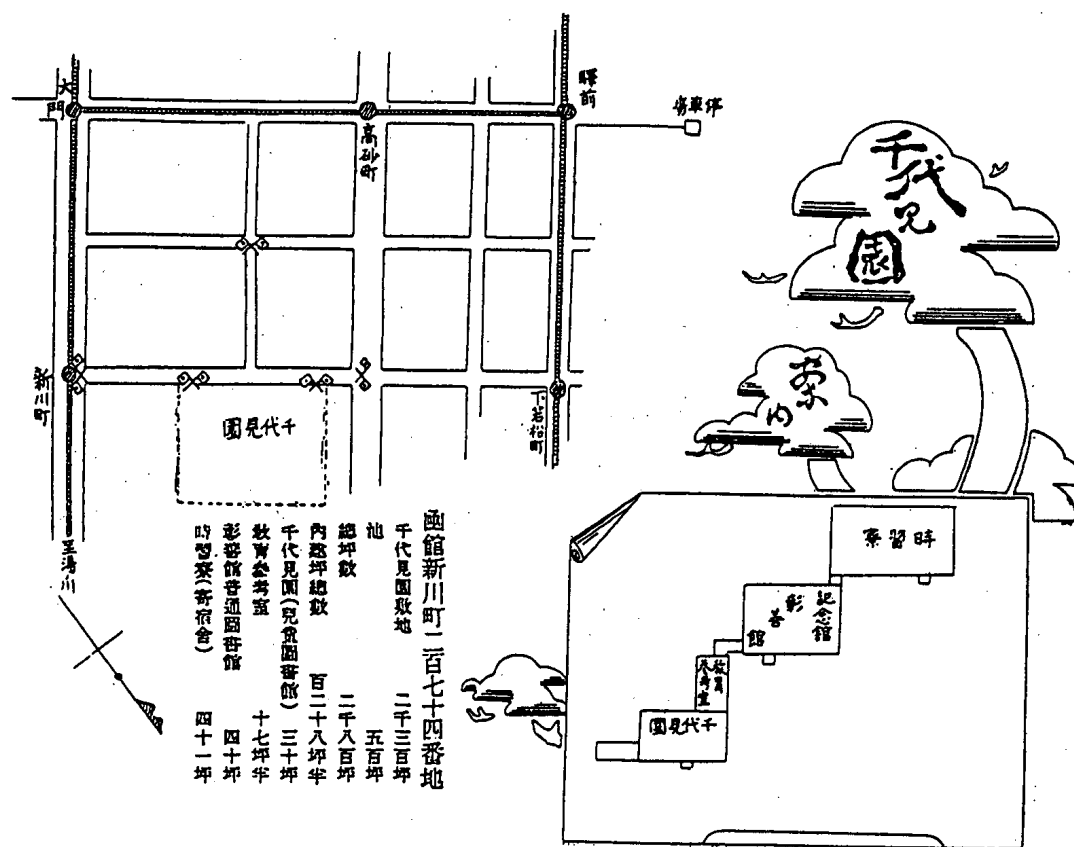


図2 千代見園見取り図(大正7年11月当時)

図で見ると千代見園というとき、この頃からこの三つの新施設と先の児童図書館千代見園とを併せた総体として、千代見園という呼称が一般的となり、慈恵院とは区別された使用となっていたものと推察される。

この時点で寺井は、先の児童図書館とこの彰善館との2館を経営することになったのである。がしかし、この2館はどの程度、地区の人々の利用があっただろうか。特に児童図書館については、殆どその記録が残されていない。むしろ、この頃には児童図書館千代見園は、その活動がほぼ休館の状態にあったのではないかと考えられる。

手懸かりとしての当時の新聞では、彰善館開館からほぼ1年後の大正8(1919)年7月の報道として、「寺井図書館に遊ぶ(一)(二)」⁹⁾の記事がみられる。この内容は、開館間もない彰善館のある敷地内の景観を称して

「門をくぐれば……池水蓮葉の青きを浮かべ古軒老枝にのらずとするも松樹杉木満座を掩ひ」と描写し、わずかに「館内の縦覧席は普通席の外幼年室、婦人室の三個に分ち外に参考室あり」とのみの記述で、取材当日の図書館自体の動きが皆目わからない。いわば、図書館のハード面としての敷地と建物があっても、ソフト面としての肝心の利用者や図書館職員などの姿が見えてこない取材内容となっている。

この頃の新聞記事ではほかに、「優良成績品の展覧会開催／千代見の園で」²⁸、「お伽大会／千代見の園で」²⁹と、わずか数行の行事開催案内の記事が見られるのみである。いわば、先の見取り図にある各施設の総合体としての千代見園と解釈される記述となっている。

こうしてみると、とくに児童図書館がやはり休館の状況にあったものと推察される。そのことを推測するものとして、『六十年史』では大正13(1924)年5月5日に、「皇太子殿下御成婚記念事業として、本院内に児童図書室を設置し、その開館式を兼ねる」³⁰との記述がみられる。毎年5月5日は慈恵院の創立記念日として、細やかに記念行事を催していたが、この年に「皇太子殿下御成婚記念事業として」、実質的に休館中の児童図書館千代見園の再興を図ったものとみられ、全国的な傾向としてあった、皇室慶事に併せた寺井四郎兵衛の事業の一つでもあったとみるべきである。

ところがこれより先、大正11(1922)年10月皇太子殿下啓記念事業として、本院内に第一保育所(建坪95坪)が開設された。さらに、11月には第二保育所(建坪34坪)も竣工し、事業がさらに拡張されていく。しかも、この保育所が施設として手狭となり、大正15(1925)年4月、第一保育所に充てるために千代見園の改修工事が着工されるのである。すなわち「理事会を開き、千代見園所在の旧児童図書館を所有主寺井四郎兵衛から無償貸与を受けたので」³¹、これを改修し保育所施設として転用したのである。

結局は、「皇太子殿下御成婚記念事業として」再興を図った児童図書館であったが、その努力にもかかわらず僅か2年で図書館としての施設その

ものまでも明け渡すこととなる。児童図書館千代見園の終焉である。

こうした児童図書館千代見園に続き、やがて彰善館にもこの余波が及ぶことになるのである。昭和6（1931）年8月28日の新聞で、「千代見園図書館／寺井氏の寄附を受け東部有志で経営する」^⑧と報じられた。「寺井四郎兵衛氏所有の新川町千代見園図書館は目下閉館中であるが」「東部有志は正式に寺井氏より寄附を受け内外を改造し図書を増し私立図書館として経営する事に決定」したものである。もうこの時点での千代見園図書館とは、彰善館を指している。

続いて、同9月20日「私立図書館／本日開館式挙行」^⑨の見出しで「寺井四郎兵衛氏が私費をもって経営していた私立図書館彰善館は財界不況の余波をうけ」閉館していたが、先の報道のごとく新川町青年団有志の菅村純之等の努力により、「再び通俗図書館として開館」「是が開館式を今二十日午前十時より同館附属託児所にて挙行了のが当日」。こうして、明治43年11月6日、寺井四郎兵衛個人の財力によって、単独の児童サービス施設として設置された私立の児童図書館千代見園と、その後に設立された彰善館も、その歴史を閉じたことになる。

あとがき

明治40年代以降、とくに全国的に通俗図書館の設立は、大正後半から昭和初期頃を最大のピークとした。「図書館施設ニ関スル訓令」（1910年）の期待に応えるかたちで、市区町村が図書館を設置しようとしたとき、その殆どが「簡易ナ施設」として、学校に付設するというパターンであり、しかも、児童図書室の付設にいたっては細やかなものであった。

開設間もない慈恵院の定款（明治34年）と、昭和6年の定款のいずれにも慈恵院の目的を掲げた条項欄には、「図書館」の字句の記載が見られない。これは、児童図書館千代見園と彰善館は、慈恵院の事業とは切り離し

た寺井四郎兵衛個人の経営になるものとして、その資金も寺井個人の財力によったものであった。この時代に独立の施設としての児童図書館設置には、とくに大きな決断であったであろう。無料で公開された児童図書館としての千代見園は、その蔵書冊数や蔵書構成、利用の実際、図書館の運用に直接に関わる職員などが明らかでなく、かつ図書館としての活動がもうひとつ見えてこないのが残念である。

寺井四郎兵衛の児童図書館設立の意図は、先にみてきたように当時の表現を借りるならば、感化救済事業の一環であり、後の彰善館もその延長上にあったことは確かであろう。そのことも、当然のことながら図書館の魅力ある利用へと結び付かなかったことの要因の一つと考えられる。

いずれにしても、児童図書館千代見園に関する記録は、彰善館も含め殆ど皆無といえる。その最大の理由は、二度にわたる失火による院舎の全焼と、昭和9（1934）年3月の函館大火が、関連資料を失わしめた最大の原因である。

本稿をまとめるにあたり、特に新聞資料と絵葉書は全面的に北海道大学附属図書館藤島隆氏にお世話になった。記して謝意を申し上げたい。

注

- ① 文部大臣訓令「図書館施設ニ関スル訓令」（明治43年2月3日）

文部大臣小松原英太郎は、この訓令のなかで「図書館設立ニ関スル注意事項」として挙げた7番目の項目で、次のごとく指示している。

一、図書館ノ設備ハ概ネ左ノ各号ニ依ルヘシ但簡易ナル図書館並小学校等ニ附設スルモノノ此ノ例ニ依ルコトヲ要セス

（一） 図書館ハ閲覧室、書庫及事務室ヲ区分スルヲ可トス其ノ他地方ノ必要ト経費ノ多少トニ相応シ成ルヘク児童室、婦人室、特別閲覧室、休憩室、製本室、使丁室等ヲ設クルヲ便トス

- ② 『函館図書館第貳年報 43.2-44.1』 函館図書館 明治44年3月3日 p.12

- ③ 仲山与七（なかやま・よしち 1859-1924）

安政6年南秋田郡岩城村生まれ。15歳にして両親を失い、明治13年函館に渡たり人力車業の輓子となる。その頃、区内元町の教会が、孤児や貧児を収容し教育

をしているのをみて、慈善事業を識る。その後、東京養老院等を視察、一方人力車業、妓楼を開業し蓄財をなしてのち廃業し、社会事業に専念する。

④ 上田大法 (うへだ・たいほう 1869-1946)

明治2年新潟県中蒲原郡萩川村生まれ。同12年11歳で真言宗を収め、20歳で函館の名刹高龍寺の住職となる。暫く東京にて曹洞宗大学林、哲学館、東京英語学校等に学ぶ。女子教育の必要を説き、私立吉祥寺女学校を創設。曹洞宗宗務所長、曹洞宗会議員等の要職を歴任し、推されて福井県永平寺顧問ともなる。

⑤ 斎藤哲治 『開館記念誌』 函館彰善館 大正8年6月 p.20

⑥ 阿部竜夫 『函館厚生院六十年史』 函館厚生院 昭和35年9月 p.4-5

⑦ 阿部竜夫 前提書 p.46

⑧ 斎藤哲治 前提書 p.32

⑨ 篠崎清次 (しのざき・せいじ 1881-1917)

明治14年三河国西加茂郡生まれ。同32年函館訓育会に入学し翌年卒業。同会の牧師となるが、同36年東京盲啞学校で盲啞教授法を研究、帰函して函館訓育会の組織を改組し私立函館訓育院と改称。爾来同院長として盲啞教育に尽力する。

平中忠信氏は、篠崎を「視力障害者でありながら、得意なおとぎ話を千代見園の日曜日毎の会合に子どもたちにお話、子どもたちに読書の喜びを指導した唯一の指導者であった。彼はキリスト教徒であったが、日露戦争に反対した平和主義者であった」と語っている。(「函館の千代見園と彰善館」ヘカッチ 第2号 1995.10 p.65)

⑩ 阿部竜夫 前提書 p.46

⑪ 巖谷小波 (いわや・さざなみ 1870-1933)

東京麹町生まれ。作家、俳人、編集者。本名季雄。明治20年硯友社に参加し、「我楽多文庫」に作品を発表、以後しだいに児童文学に関わる。同28年、博文館の「少年世界」の主筆となる。創作のみならず口演童話で全国を巡り「お伽のおじさん」として親しまれた。主な著書に『桃太郎主義の教育』(1915年)。

⑫ 戊申文庫は、明治42(1909)年2月11日、札幌女子小学校(現大通小学校)に設置されたと言われているが、詳細は次稿に予定している。

⑬ 『函館図書館第貳年報 43.2-44.1』 p.5

⑭ 阿部竜夫 前提書 p.48

⑮ 「函館毎日新聞」No10093, 10094 大正2年8月15, 16日

⑯ 斎藤哲治 前提書 p.33-34

⑰ 「函館毎日新聞」No11043 大正5年4月24日

⑱ 斎藤哲治 前提書 p.4

⑲ 阿部竜夫 前提書 p.81

- ⑳ 「函館毎日新聞」 No.11943 大正7年11月8日
- ㉑ 「函館毎日新聞」 No.12191, 12192 大正8年7月18, 19日
- ㉒ 「函館毎日新聞」 No.12205 大正8年8月1日
- ㉓ 「函館毎日新聞」 No.12217 大正8年8月13日
- ㉔ 阿部竜夫 前提書 p.99
- ㉕ 阿部竜夫 前提書 p.105
- ㉖ 「函館毎日新聞」 No.16566 昭和6年8月28日
- ㉗ 「函館日日新聞」 No.4930 昭和6年9月20日

《付・児童図書館千代見園、彰善館関係年表》

- 明治33 (1900) 年11月11日 函館慈恵院 (新川町274番地) 竣工、開院式
- 明治37 (1904) 年7月24日 函館慈恵院育児部 (建坪120坪) 増築竣工
- 明治38 (1905) 年12月28日 育児部から出火全焼 (第1回火災)
- 明治39 (1906) 年9月30日 育児舎 (建坪150坪) 竣工
- 明治41 (1908) 年7月25日 函館慈恵院院舎 (建坪350坪) 竣工
- 明治43 (1910) 年11月6日 児童図書館千代見園開設、無料公開 (建坪30坪)
- 明治44 (1911) 年8月29日 浴場から出火院舎全焼 (第2回火災)
- 大正2 (1913) 年8月23日 巖谷小波、千代見園で講演会
- 大正6 (1917) 年5月一日 彰善館着工
- 大正7 (1918) 年11月10日 彰善館 (建坪40坪) 竣工、開館式
- 11月15日 彰善館一般開館
- 大正8 (1919) 年8月1日 千代見園で優良成績品展覧会開催 (同31日迄)
- 8月20日 千代見園でお伽大会開催
- 大正13 (1924) 年1月26日 皇太子殿下御成に際し、社会事業家として寺井四郎兵衛宮内省から表彰
- 5月5日 皇太子殿下御成婚記念児童図書室開室
- 大正15 (1926) 年4月15日 保育所拡張のため児童図書館千代見園を改修し、保育所に転用
- 昭和6 (1931) 年9月20日 休館中の彰善館、菅村純之等により通俗図書館として再開
- 昭和9 (1934) 年3月21日 函館大火。本院も育児部以外全焼 (第3回火災)

※ この年表は、『六十年史』をもとに作成したものである。